福島県伊達郡桑折町で活動して
～Tourism Practice（観光演習）での学び～

団体名●Tourism　Practice／代表者名●齋藤千恵（人文学部国際文化学科教授）

はじめに

人文学部のTourism Practiceの授業で、福島県伊達郡桑折町に伺った。福島県は、2011年3月に起きた東日本大震災の被災地であるとともに、地震に引き続いて起きた福島第一原子力発電所事故で、被害を受けてきた。これに加えて、桑折町は、2021年、2022年と東日本大震災と同じ規模の地震災害に見舞われてきた。こうして立て続けに被害にあった町の観光まちづくりに関する提案が、大学生たちの若い視点から行われた。

蔵が撤去され空き地が目立つ街並み

桑折町とTourism Practice

桑折町は、旧奥州街道と旧羽州街道が交叉する町であり、江戸時代まで桑折宿として賑わってきた。明治期に入ると、養蚕が盛んになり、蔵があちらこちらに建てられた。桑折町でのまちづくりは、旧奥州街道沿いにある蔵を生かした歴史的な街並みの保存を中心としたもので、東日本大震災前から行われていた。東日本大震災で、一部の蔵が解体されたものの、復興期を経て再開されたまちづくりでも、蔵は旧奥州街道沿いの街並みの修景には、重要な要素であってきた。しかしながら、2021年及び2022年に起きた地震により、旧奥州街道沿いに建っていた蔵は損傷した。蔵から土壁が剥がれてしまったのであった。土壁を修復することにより、蔵は再度奥州街道沿いの歴史的町並み保存に一役買うと思われたが、土壁を修復する技術は町には残っていなかった。結果として、土壁が剥がれた蔵は、解体、撤去され、町のメインストリートである旧奥州街道沿いには、空き地が目立つこととなった。

Tourism Practiceで、学生とともに桑折町を訪れたのは、蔵が撤去されたばかりの頃であった。Tourism Practiceのテーマは、「まちづくり、復興、観光」というもので、旧奥州街道沿いの街並みの修景をどうするのか、町外からの人を魅了するまちはどのようなものなのかということが課題であった。町も、若い人々の視点からのアイディアを期待していた。

Tourism Practiceの授業で桑折町を訪れた学生たちは、街並みや産業を調査した。桑折町は「献上桃の郷」として知られており、また、王林が最初に作られた場所でもあった。コロナ禍から、桑折町からリモートでの仕事を可能にする共有オフィススペースも見学した。

学生たちの提案―終わりに代えて―

こうしたフィールドワークを経て、金沢に帰ってきた学生たちは、金沢のまちづくりやミュージアムを参考にし、若い視点から桑折町の方々をオーディエンスに、プレゼンテーションを行った。彼女らは、桑折町の産物である桃を使ったパフェづくりや、桃のミュージアムの設立、空き地にキッチンカーを導入して、町の食として町外からの人々に振舞われてきた団子汁を提供するなど提案した。彼女たちの発表スライドは、若い人ならでのイラストを多用しており、発表を聞いている人々を楽しませた。中でも、桃のミュージアムは、町の方々に関心をもってもらったのであった。

羽州街道と奥州街道の合流点で説明を受ける学生たち